

## 第1回 聖籠中学校運営方式検討委員会 議事要旨

日 時	令和7年11月14日（金） 午後3時00～午後4時30分
場 所	聖籠町役場 第2会議室
出席委員	大橋委員、有井委員、田中（一）委員、田中（健）委員、諏訪委員、丸田委員、宮川委員
欠席委員	なし
事 務 局	小林教育未来課長、昆教育未来課長補佐、阿部副参事、大澤主事、小林総合政策課長、高橋主幹、宮森主任
次 第	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 開会</li> <li>2 委嘱状交付</li> <li>3 教育長挨拶</li> <li>4 委員及び事務局紹介</li> <li>5 会議の公開</li> <li>6 議事           <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 委員長及び代理者の選出</li> <li>(2) 聖籠中学校運営方式検討委員会の目的</li> <li>(3) これまでの総合教育会議の概要</li> <li>(4) 卒業生、教職員へのアンケートの実施</li> </ul> </li> <li>7 事務連絡</li> <li>8 閉会</li> </ul>

### 会議の公開

○事務局から、会議は積極的に公開すべきではあるが、現在も運営中である聖籠中学校の学校運営に密接に関わる内容を取り上げるということ、また、委員はこれまでの経験に基づき、具体的な事例を交えて意見交換を行うため、非公開としたい旨を説明。（一同異議なし。）

### 議事（1）委員長及び代理者の選出

○委員の互選により大橋委員が委員長に選任され、委員長の指名により田中（一）委員が代理者に定められた。

### 議事（2）聖籠中学校運営方式検討委員会の目的

事務局	(資料に沿って説明)
委員長	意見など特になければ、このあとの審議の中で適宜ご意見、ご質問いただきたい。

### 議事（3）これまでの総合教育会議の概要

事務局	(資料に沿って説明)
委員長	令和4年度に教科センター方式を一時期再開したが、課題が多く、令和5年度には一般的な学級方式に戻したとあったが、どのような課題が生じたのか。
委 員	聖籠中学校では、1年を5節に分けて目標設定などを行っている。令和5年度は、第1節は学級作りに重点を置くために一旦学級を固定し、第2節から教科センター方式を再開

	し学習に注力する予定となっていた。しかし、担任や学年主任には、移動の多い教科センター方式では、受け持ちの生徒に目が届かないという意見が多かった。具体的には、不適切な行動をする生徒がいたが、職員の目が届かないため注意ができないなどの課題があった。教科センター方式を経験したことがある教職員はほとんどおらず、生徒からも移動は面倒だという意見があった。移動が多く孤立して居場所がなくなる生徒もいた。そのほか、学級崩壊が懸念されたクラスがあり、進級の段階で学級数を増やしクラス替えをしたところ、落ち着いて学習に取組める雰囲気ができたが、教科センター方式の再開で崩れるのではないかという意見もあった。このような状況から、令和5年度は学級を固定した運営をすることとなった。
事務局	令和6年度以降も学級を固定し、令和7年度は教務室も学年ごとの教務室となっている。
委 員	コロナ禍以前の、教科センター方式を取り入れた成果についてのデータはあるのか。
事務局	今のところ町では持っていない。
委 員	教科センター方式を取り入れたメリットがあったのであれば、やめてしまうのはもったいない。課題の一方で、探究的な学びを推進する上では教科の専門性を高めていくことを目指す教科センター方式の意義は大きい。不登校の問題では、学級という縛りが足かせになる場合もある。そのため、どちらがメリットとしてあるのか、バランスを考えていかなければいけないと考える。
委 員	論点を整理すべきである。施設の有効な使い方の問題、教科センター方式が時代背景や生徒指導、生徒の状況に合っているのかという問題など、複数の問題が絡み合っている。また、教師の動きと生徒の動きを一緒に議論しているが、それぞれがどうあるべきかということは、一旦切り離して考えても良いのではないか。 現在、教科センター方式に対応した施設を、学級を固定した方式で運用しているが、使用状況に不具合はないのか。有効に活用されているのか。
委 員	今の運用において、施設の使用上において困っていることはないが、ホームベースが空いていてもったいないという観点はある。ホームベースは、部活で走る、総合的な学習の時間に「カタリバ」という学習をする際に使用する、更衣室として使用するという時以外は空いている状態である。
委 員	教科センター方式で運用していた当時と現在で教室の使い方は変わっているのか。当時の環境だからできる授業、今の環境だからできる授業などの変化はあるか。
委 員	今は各教室にテレビが配置され、教員もタブレットを持っているため、どの教室でもそれらを活用し教材などを見せられる状況だが、当時はICT機器はまだあまりなく、教科の部屋にポスターを貼ったり、映像を投影したりしていて、教科の部屋にプロジェクターがあるのは便利だと感じていた。教科の教務室と教室が近く、教員としては準備した教材などをすぐに持って行けたことも良かった点である。しかし、教科センター方式のノウハウがあったわけではなく、掲示物を整えるなどの考えられることをやっていたという状況であった。教員にとっては、教科センター方式における施設の有効な活用方法などの研修がないことは厳しいものであった。
委 員	各教室の広さが違い、学級が同じ人数に入るには窮屈な教室もあることが、施設を今の運用で使うことの不具合だと考える。 教科センター方式の当時は、教科の教務室で同じ学年を持つ同じ教科の教員全員が、単

	元構成を話し合ったり分担したりながら同じペースで進むことができ、教員にとっても勉強になったことは、良かった点である。また、道具の準備が必要な学習の際には、教科の教室にセットしておくことで、生徒がそこに来てスムーズに授業ができた。その他にも備えてあるものすぐに取ってきて使うことができたことは利点があった。
委員長	まずは感じていることを出してもらった。この委員会では、最終的には何を優先するのかではなく、総合的に目指すところを提言すべきと考えている。今後も感じていることを出し合いながら考えていきたい。

#### 議事（4）卒業生、教職員へのアンケートの実施

事務局	(資料に沿って説明)
委員長	アンケートを実施した場合、私達が委員会で検討するにあたってアンケート結果を参考にする必要はあるか。
事務局	委員会でも参考にしていただきたいが、参考にする必要はない又はアンケート自体実施する必要がないという考え方であれば、ご意見いただきたい。
委 員	目的について、総合教育会議においては、アンケートは教科センター方式を取り入れた効果の検証方法の一つという目的になっていたと思うが、今の説明では検討の参考資料として声を聞くという位置づけとなっている。目的をもう一度整理いただきたい。
事務局	総合教育会議では、卒業生や保護者にも教科センター方式に対してどう思っていたのかを聞いた上で検討していきたいという意見があった。総合教育会議でもアンケート案を提示したが、アンケートも含めて専門的な知識のある方に意見を聞いて検討する必要があるという結論に至っている。
委 員	それでは、目的は効果検証ではなく、声を聞くためという位置づけで理解した。 案の質問項目では、教科センター方式を純粋に評価するのではなく、当時の学校への印象が強く反映されるのではないか。おそらく、学校が楽しかったという人からは制度も良かったという意見が、楽しくなかったという人からは制度や施設にその要因があったという意見が上がる。それらの結果を我々がどう受け止めれば良いか難しい。
委 員	生徒には、聖籠中学校が教科センター方式を取っているという認識はあるのか。
委 員	分かっていたが、それが良かったかどうかと聞いても答えるのは難しいと感じる。 学力の向上については、当時も今あまり変わらない印象である。
委 員	中学卒業後、高校では固定の学級が多く、大学は教科センター方式に似ているため、それらと比較してどちらが良いかという質問の意図がアンケートから読み取れるか。
委 員	難しいと感じる。
委 員	開校当初は、教職員の人数も多く、教科ごとに少人数クラスに編成して授業をしていた。そのため教室も小さい。これが本来の教科センター方式だが、令和以降は、教職員の人数も限られ、少人数クラスを編成して授業ができていたのは数学だけであった。数学以外は教科ごとのクラス編成ではなく、単に学級が教科の教室に移動するということしかできていなかったため、完全な教科センター方式で授業ができていたという状況ではない。授業時間は当初の70分から60分、50分と見直しされた経緯があり、最初の頃はモジュール学習も取り入れていた。こういった経緯がある中で、教科センター方式は良かったか、という

	聞き方で検証は難しい。
委員長	教員も、授業をしていて大変だったという人は悪く評価し、充実感を持っていたという人は良い評価をする傾向になるのではないか。
委 員	教員のアンケートは、教員がいかに前向きに取り組んだかということの表れにもなるが、教科センター方式は悪かったという結果でも公表する必要があることや、良かったという結果の場合は教科センター方式を継続する方向性になると考えられるので、いずれにしても取り扱いが難しいと感じた。
委 員	教員へのアンケートは、かなり低い評価が出るのではないかと思う。
委 員	開校当時の教職員は強い思いを持って取組んでいたと思うが、だんだん薄れてしまい、後半は他の学校と違って嫌だったと思っている教員が増えるのではないか。
委 員	教員は他の学校でやってきたノウハウが通じないため、その苦しさを多少なりとも感じていると思う。
委員長	<p>最初は理念などが共有されるが、人が入れ替わった時にそれが説明されていたかというとそうではないのではないか。学級があるから不登校やいじめが起こるという考え方があり、教科センター方式では集団が固定されないことがメリットとされていた。このような理念がいつしか共有されなくなり、移動するということだけが残ったと推測すると、最初の頃の教員からの評価は良く、後半は評価が下がることが予想されるが、その要因を分析するということにアンケートを活用するのはいかがか。</p> <p>質問の仕方は、教科センター方式が良かったかと聞いても、本人はそれしか経験しておらず、他と比較ができないので、当時の学校がどうだったか満足度を聞く質問にするというやり方もある。充実していたという回答が多ければ、それは教科センター方式での教育活動が充実していたという一つの結論となり、年度ごとの推移が当初と後半で比較できると考えたが、アンケート実施の賛否はいかがか。</p>
委 員	費用対効果の面でも、今この案の内容のアンケートを実施するのはデメリットが大きいと考える。声を聞かないというわけではなく、検討を進めていく中で、内容とタイミングと目的に合わせて、アンケート以外にもヒアリングやインタビューなどの可能性も含めて検討していく方が良い。委員長が提案した、要因の分析のために活用するのであれば、それに合わせた質問項目などを検討してから実施すべきである。
委 員	案の内容のアンケートは実施しない方が良い。特に最後の項目は、どちらの結果が出ても町民の意見なのだから反映しなければいけないという方向性になり、今後の縛りが大きく、本来検討すべき論点どころでなくなってしまう。
委員長	それでは、今の段階ではアンケートの実施は一旦中止し、議論が進む中で、アンケートという方法に限らず、必要な情報を適切な方法で調査するという結論で良いか。教科センター方式と学級を固定した方式のどちらが良いかという議論ではなく、まず聖籠中学校の生徒たちにどのような教育が大事なのかというところがあり、そのためにどのような学校運営をするのが良いかということが論点の中心であるべきと考えるがいかがか。
一 同	異議なし。
委員長	それでは、アンケートについては、今後必要な時に、改めて検討していくこととする。以上で本日の議事を終了する。

以上